【翻訳と注解】1514 年1 月18 日付F・ヴェットーリ発　N・マキアヴェッリ宛書簡

著者	石黒 盛久
著者別表示	Ishiguro Morihisa
雑誌名	金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要
号	14
ページ	125-131
発行年	2022-03-17
URL	http://doi.org/10.24517/00065768

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

【翻訳と注解】1514 年 1 月 18 日付 F・ヴェットーリ発 N・マキアヴェッリ宛書簡

石黒　盛久

Translation and notes: A letter from Francesco Vettori to Niccolò Machiavelli (1514 January 18)

Morihisa ISHIGURO

はじめに

以下に訳出・注解するのは 16 世紀初頭のイタリア・フィレンツェで活躍した貴族・外交官・政治家フランチェスコ・ヴェットーリが，友人ニッコロ・マキアヴェッリに書き送った，1514 年 1 月 18 日付の書簡である。この試みは今回に先立ち，本誌『金沢大学人間社会学域学校教育系紀要』第 12 号，第 13 号や,『世界史研究論叢』第 9 号及び『言語文化論叢』第 25 号等の媒体を通じ，継続的に行ってきた一連のヴェットーリ発マキアヴェッリ宛書簡翻訳の一環である(今年度は本稿と並行して,『世界史研究論叢』第 11 号に 1513 年 12 月 24 日付書簡の翻訳と注解を刊行予定である)。本書簡を含む，マキアヴェッリ／ヴェットーリ往復書簡のルネサンス政治文化史研究上の意義については，これらの先行するヴェットーリ書簡の翻訳に,「はじめに」「解題」等の名称のもと付した，一連の文章においても言及しているので，重複を避けたい。関心ある向きはそれらを参照いただければ幸いである。

1515 年 1 月 31 日付のヴェットーリ宛書簡にマキアヴェッリ自身が語るように，両者の往復書簡の特色は，それが時には当代イタリアの国家の大事を論じる，後者の秘書官時代の使節書簡を彷彿とさせる，内容上も文体上も謹厳な公的性格を強く帯びたものでありながら,「ページをめくるや」,真剣ながらも所詮は私的な身辺雑事に過ぎない，自身や友人知人への便宜の提供の依頼や，果てはお互い同士のあけすけな色恋話にも筆を及ぼす，世間の万華鏡のようなあり方を，意図的に選択していることである。書の達人が一つの作品の中で真行草，文字の三体を巧みに使い分けながら，光彩陸離たる作品を作り上げるのにも似ていよう。内容・文体の真行草の割合は，個々の書簡によって異なり，それがまた往復書簡全体に一つの諧調を与えているが，その中でもこの 1 月 18 日書簡は，あけすけとした艶笑譚に焦点を当てた,「草」の性格が前面に押し出された書簡である。

そこには，ヴェットーリとマキアヴェッリのみならず，フィリッポ・カサヴェッキアやジュリアーノ・ブランカッチ，ヤコポ・ジャンフィリアッツィ，ドナート・デル・コルノら，彼等を取り巻く 16 世紀初頭フィレンツェの中上流社会の，フィレンツェ史研究においてよく「友人関係」(amicizia)と概念化される，実利と友情が複雑に絡み合った人間関係の一端が，生き生きと描き出されており，まさに 16 世紀フィレンツェ社会史研究の，好史料を提供してくれている。ローマ駐箚大使であったヴェットーリや「元」内閣官房長だったマキアヴェッリはもちろん，この時期頻繁に登場するジャンフィリアッツィやカサヴェッキア，ブランカッチその他の人物もまた，この時期のマキアヴェッリ―ヴェットーリ往復書簡に読み取られるように，ローマ／フィレンツェ間を往復し，遊び暮らしているように見える一方，それぞれ属領各地の

令和 3 年 10 月 1 日受理

代官職や都市内の各種委員会の議員として，国家フィレンツェの統治に少なからぬ発言力を分かち持つ人々であった。オランダの偉大な歴史家ホイジンガは，その著『ホモ・ルーデンス』において，人間の文化の起源を「遊び」に求め，戦争も外交も政治も，思想や芸術も人間の「遊び」の本能の眩暈に支えられてきたことを示唆したが，そうした「遊び」ごころが，人間生活の万般を活気づけた最後の時代こそ，ルネサンス文化の時代だったのだと感じる。

今回訳出した手紙の核をなす，隣家の未亡人やその娘に対するヴェットーリの批評，あるいは彼らをヴェットーリ邸に招き寄せるためのブランカッチやカサヴェッキアの算段，これらのフィレンツェ上流階級の「公達」とおびき出された隣人一家の歓談―それらを読むうち，突然ながら訳者には『源氏物語』の「雨夜の品定め」のくだりが思い出された。かの世界最古の長編小説においてもまた，男女間の恋の駆け引きの艶話の世界と，源氏が冷泉帝の後見として国家の実権を握るという，政治の壮大な「遊び」は物語の深層において共振しあっているのだ。

だがこの手紙を訳しつつ，もう一つ考えなければならない点にも突き当たっている。ここに描き出された，ヴェットーリ邸での冬の日の隣家の未亡人やその娘との際どい交際は，どこまでが真でどこまでが絵空事なのだろうか。ヴェットーリの見事な筆力で生き生きと描き出されたこの挿話において用いられた，いくつかの台詞や筋立てと既存の喜劇のそれとの重複性もすでに指摘されている（そもそも「未亡人とその娘」を如何に誑かすかという筋立てを見れば，この「実話」とマキアヴェッリの『マンドラーゴラ』や，この喜劇の発想源となったテレンティウスの喜劇の類似性に思いを致さざるを得ない）。もちろんヴェットーリが何の真実味もない絵空事を語っているとも思えない。だが彼らに先立つ，エネア・シルビオ・ビッコロミーニの『二人の恋人たち』のように，書簡体の創作作品が広く江湖に受け入れられていたことは考慮に入れるべきであろう。ヴェットーリたちが自身の生活を描写するにあたり，それを何らかの既存のモデルに準えて描き出すことにより，自身の生活を理想化し互いにそれを楽しみあっていた可能性は真剣に考慮すべきだと考える。

それともう一つ，今回訳出した書簡は数々のマキアヴェッリ／ヴェットーリ往復書簡のなかでも，「草」の部分が顕著な書簡であるが，最後の部分であたかも付け足しのように，メディチ家への『君主論』献呈の問題や，従来からの懸案であるドナートの議員職就任問題への言及がなされていることは，何を示唆しているのであろうか（本来ならもっと詳細な言及がなされなければならない話題のはずである）。以前想定したように，ヴェットーリが遊びの上での〈幇間〉として，マキアヴェッリに狎れ親しんでいただけで，後者から責任の伴う依頼事をされるのを，内心では重荷に感じており，それゆえにこそ手紙の大半を，たわいのない艶話で埋め尽くして，肝心要の事案について婉曲に希望に添えないことを示唆したのだろうか。この前後の往復書簡に伺われる，メディチ政権中枢の前政権の懐刀マキアヴェッリに対する警戒心や，マキアヴェッリの仕えたソデリーニ政権から再興したメディチ政権への政権移行前後のヴェットーリの行動に対する，メディチ家の少なからぬ不満を考えれば，そうした可能性は否定しがたい。

だがその一方でやはりこの前後の手紙から看取されるように，当時の政局に密接に絡むことのないドナートの名誉職獲得に対してヴェットーリが書き記した手練手管は緻密なもので，彼が友の願いに真剣に応じようとしていることを得心させるものである。『君主論』奉呈問題についても，マキアヴェッリの政治外交的見識のメディチ家のレオ 10 世やジュリオ枢機卿らに対する推挽に払った彼の努力は相当なものであることが確認できる。そうである以上『君主論』の奉呈にヴェットーリが，まるで危険文書を奉呈するかの如き懸念を抱いていたとみるのは，同書がトリエント公会議後教会により禁書目録

に挿入されたことから逆算する，穿ちすぎた見方ではないか。文中にもあるようにこの時点でヴェットーリが,『君主論』の全貌を確認していなかったことは間違いないことだろう（通常はこの時点でマキアヴェッリがヴェットーリに送付したバージョンは,『君主論』を構成する全25章中，レオ 10 世による教会国家隆盛を祈念する言葉で締めくくられる，第 11 章までとされるが，この見解に私は疑問を抱いている）。

ともあれ,彼の数々の著作が生み出された「苗床」としての，マキアヴェッリがその教養ある友人たちと作り上げていた生活世界を復元し，彼の思想の内容とその形成を，その時代の具体的な社会史の文脈から考察するという作業は，世界的にもいまだその緒に就いたばかりである。今回企画した一連のマキアヴェッリ／ヴェットーリ往復書簡の全体の邦訳作業は，マキアヴェッリの〈生活〉復元のための基礎作業として，一定の意義を持ちうるのではないかと自負している。

本文と注解

ローマ　1514 年 1 月 18 日

盛名赫々たる士　ニッコロ・マキアヴェッリ殿へ

フィレンツェにて

親愛なる我が友よ。僕はいつも君の天賦の才と大事小事にかかわらず君の意見とを，高く買ってきた。だが君が寄こした最後の手紙で君が書き記した，フィリッポ[1]とブランカッチョ[2]についての話は，この数日間のうちに僕にとって事実となってしまった。なぜなら君も知っての通り，私は自分自身より他の人のことを信用していて，それがどんな人であれ自分よりもその他人をまず満足させようとするからだ。まさにこのことから，彼らが僕に対して行った説得に動かされて，別の手紙で君に書き送ったように[3]，僕は彼らを信用した結果，サーノ殿に対して[4]，ヤコポ・ジャンフィリアッツィが私に更に何か書き送って来たなら[5]，彼にそれを知

[1] フィリッポ・ダ・カサヴェッキア（1472〜?）は，フィビッツアーノやバルガの司政官に就任した経歴を持つ人物（この時期にマキアヴェッリ宛書簡が残っている）。マキアヴェッリの古い友人で，後者がドイツ派遣大使職の座を逸した際に慰問の三行連句詩を送ったり，またその指導により長年のピサ戦争が終結した際には書簡で，「古のヘブライ人もその他の人々も，これ以上の預言者を有したことはなかったろう」と，マキアヴェッリのことを激賞している。本書簡に先立つ名高い 1513 年 12 月 10 日マキアヴェッリ発ヴェットーリ書簡に伺える通り，マキアヴェッリが『君主論』の草稿を最初に読ませたのもカサヴェッキアである。また本書簡にもうかがえる通り，1513 年末から 1514 年初のこの時期，彼はローマとフィレンツェの間をしばしば往復していて，『君主論』脱稿の件も 12 月 10 日書簡のローマ到着以前に，彼の口からヴェットーリに伝えられているようである。この手紙に先立つ 1513 年 12 月 19 日付マキアヴェッリ発ヴェットーリ宛書簡の末尾に示唆されるように，フィリッポ・カサヴェッキアはこの頃フィレンツェを立ち，ローマに姿を現していた（1513 年 12 月 24 日付ヴェットーリ発マキアヴェッリ宛書簡参照）。

[2] ジュリアーノ・ブランカッチ通称ブランカッチョ。マキアヴェッリとヴェットーリの共通の友人の一人で，1513 年から 1514 年にかけてのこの時期，彼もまたローマとフィレンツェの間を頻繁に行き来していた。カサヴェッキアとともに，マキアヴェッリとヴェットーリの往復書簡の配達人の役割をも担っていたようである。1513 年 6 月頃ローマのヴェットーリ宅に長期で滞在したが，その折に同性愛者の噂の高いサーノ氏が，ヴェットーリのもとを頻繁に来訪することに苦言を呈しており，そのいきさつは本書簡の中にも言及されている（1513 年 12 月 24 日付ヴェットーリ発マキアヴェッリ宛書簡参照）。

[3] 1513 年 12 月 24 日付ヴェットーリ発マキアヴェッリ宛書簡参照。

[4] サーノ氏とはフィリッポ・カサヴェッキアの紹介でヴェットーリの知遇を得た人物のようである。これに先立つ 1514 年 1 月 5 日付マキアヴェッリ発ヴェットーリ宛書簡，更にその前の 1513 年 12 月 24 日付ヴェットーリ発マキアヴェッリ宛書簡においても言及されているが，当時男色家として名を馳せた人物であったようだ。元来彼はマキアヴェッリの友人ドナード・デ・コルノの公職就任問題について，当時のフィレンツェ政界の有力者でローマ駐箚大使としてヴェットーリの前任者であった，ヤコポ・ジャンフィリアッツィとヴェットーリの間の連絡役を受け持っていたが，それに加え性的趣味の方面でもヴェットーリとの関係を深めたようである。

[5] ヤコポ・ジャンフィリアッツイ（1470〜1549）は 15

らせると，だから私のところにわざわざ会いにやって来るため骨を折るには及ばないと，要領よく説明してやった。こうしたのも，かかる案件に関しては僕よりもずっと抜け目のない彼が，僕の言いたいことを難なく理解し得るようにと慮ってのことだ。かくして僕はここにしばしばやって来る二人のご婦人に[6]，私が尊敬措く能わざる親族の者がここにやって来た上に，この人が彼女らをここで見かけることは僕にとって望ましくないことだから，僕が彼女らを呼び出さない限り，ここにやってこないようにと言いつけてややることにした。

約8日間にわたってこうした状態を続けたので，自身の用事のためにやって来た何人かの人と，文法を生業とするドナート・ボッシ[7]の他，ここを誰も訪れてくることはなかった。このポッシという男は，いつも変なしかめっ面をしている奴さ。彼はある語彙の語源はどこにあるのかとか,名詞はいかように作られるのかとか,そうでなければ動詞は結句の句頭に置くべきか,それとも句末に置くべきかといったことに類した，どうでもいいことしか話さない奴だよ。そんなことは聞かされた側にとっては，災難でしかないよ。僕は彼に対してこんな馬鹿げた話をするよう頼むことしかできなかったし，そのことがこの御仁に，そうした馬鹿話を心行くまで話しまくらせるきっかけを与えてしまった。このような暮らしは私にとっても退屈なものだったが，フィリッポ［・カサヴェッキア］とジュリアーノ［・ブランカッチョ］が，彼らの過ちに気が付いてくれたから，僕もそれを何とか耐え忍ぶことができたわけだ。そうしたことが早々に生じることとなった。というのもある晩，僕たちが暖をとるため火にあたっていた時，ジュリアーノが僕に，僕の隣家のあるご婦人を招待するべきじゃないかと主張し始めたのさ。一夜，彼女を夕食にお招きしないのは，大変無調法なことじゃないかと彼は言うんだ。そんな無調法は，世の多くの人からの誹りの種だし，このように気難しく閉じこもっている者は，変人とか野人と思われかねないとすら，彼はまくし立てた。

ところで僕は彼ら両人が僕に彼女を招待するようけしかけた理由を，君がよく理解できるように，この御婦人の境遇について君に話しておかなくてはならないだろう。先に君に書いて送ったように今の僕の住居は，教皇様の宮殿に近い大変近い所だが，ちょっと閑散とした場所で人通りも少なく，隣人たちは落ちぶれ果てた者たちばかりだ。ところが，こうした僕の住まいの隣に，ある素性正しいご当地ローマ生まれの未亡人が，快適な住居を構えていて，僕と良き隣人づきあいをしていたし今もしている[8]。さてこのちょっと臺が立ってしまった御婦人には，歳の頃 20 歳くらいのたいそう美しい娘がいるが,この娘はずっと何か仕事をしているようだ。またこの御婦人にはもう一人 14 歳になる息子がいるが，この子もまた十分に躾けられた上品な子で，その年頃に相応しい良い立ち居振る舞いと折り目正しさとを備えている。互いに隣家

世紀末から 16 世紀前半にかけてのフィレンツェの政治家。フィレンツェ有数の旧家に生まれ，ピエロ・デ・メディチの側近としてその政界における経歴を始めたにもかかわらず，メディチ追放後の復興された共和国においても要職を歴任し，1512 年のメディチ家復権によりさらにその威勢を高めている。その結果として本書簡にもうかがえるように，ヴェットーリの先任者としてフィレンツェ共和国のローマ駐在大使にも登用されているが，ここに語られるサーノ殿を介したヴェットーリに依頼した要件がいかなるものであったかは，つまびらかではない。但しこの書簡の日付以後の 1515 年にも，大使ヴェットーリを支援する特任大使として彼がローマに再度派遣されていることは，両者の交渉を考える上で注目すべきであろう。ジャンフィリアッツィはメディチ家の恩顧の下，その後も大統領職等を歴任し常に政界の中枢にあり，1537 年のコジモ 1 世のフィレンツェ公位推戴にも関与した。

[6] 1513 年 12 月 24 日付ヴェットーリ発マキアヴェッリ宛書簡参照。

[7] ドナート・ボッシとはジャン・アルベルト・ディ・ドナート・ボッシのことと考えられる。彼の『文法教程』(Institutiones Gramatice)という著作が今日に残されている。1512 年以降の詳しい消息は不明。

[8] 原文にある buona compagna は，単に良好な近隣関係のみならず，軽度の性的な関係をも示唆しているようである。

でもあり，また双方の菜園が入り混じっていることもあって，僕はこのご婦人とごく表面的なものとはいえ，なにがしかの交渉を持たざるを得なかった。また彼女は僕に教皇様や市政長官へのとりなしを依頼するため，しばしば僕の家にやって来た。そこで僕はキリスト者として，未亡人や孤児にしてやらなければならない通りに[9]，彼女に対してできうる限りの支援をしてやっていた。まさにこのご婦人を夕食に招待しろと，ジュリアーノは僕に言ったんだ。件の少年についてはフィリッポが，アレッサンドロ・ナージの例を引き合いに出し[10]，ジュリアーノに助け舟を出してきた。かつてフィリッポが別の機会にローマにいた時，彼はアレッサンドロのもとをしばしば訪れ，冬の夕べともなればこの御仁がいつでも何がしかの隣人と行を共にしていたということを，彼がいつもしているのを君も承知の通りの，他の例と併せて持ち出したんだ。彼とジュリアーノが言っていることがよくわかったので，僕は彼らがよいと思ったようにすることを了承した訳さ。

こうした思案を僕らが一緒にやっていたのが，ちょうど夜の 2 時ごろだ[11]。だが僕は彼らがその夜，この隣人たちを呼び出そうとは思いもよらなかった。そこで彼らが出かけてしまった後，フィレンツェの 10 人委員会あての書簡の執筆にとりかかり始めた[12]。それを作成するにあたっては，教皇様[13]の計画の全てを，彼らに明らかにしないよういろいろ考えをめぐらせた。というのも教皇様のこうしたお考えが，我が方の閣僚の方々にとって好ましいものであるかどうか，ちょっとよくわからなかったからだ。だがその一方でこの地に駐在する僕が怠けているとも，才覚がないとも閣僚の方々に思われないように，そしてまたそれにふさわしい敬意を僕が彼らに払っていないと思われないように，この手紙があまりにぶっきらぼうなものにならないようにも配慮した。これらの方々が，我がフィレンツェにおいてあらゆる点において第一等の人士であること[14]を考えればなおさらだ。僕がこのような思いに耽っている間に，このご婦人がその娘や息子に加えて，あたかもこの一団の護衛人ででもあるかのように，彼女の弟までもを引き連れて，我が家に姿を現した。彼女を見て僕は，僕の性分が僕に許す限りの最も懇篤なやり方で，このご婦人を歓待して差し上げた。こう書くのも君も知っての通り，こうした心のこもった歓待やそれに伴うお世辞の言葉を，僕は得意としていないからだ。ともあれ彼女がやって来たので僕は役所宛の手紙の執筆を，目下の政治状況について判断を下そうとするなら，主顕祭に際して行われる全体集会において[15]，スイス人たちが下す決定を待つべきだという言葉によって，手短に締めくくって切り上げた。

かくしてジュリアーノはこの娘と，フィリッポはその男の子とおしゃべりを始めた。僕はと言えば，彼らがしたいようにできるよう，母親たるご婦人とその弟殿を傍らに招き寄せ，彼らが関っている訴訟事につき尋ねてやったが，それは彼らをこのような会話につなぎとめることにより，朋友たちのために時間稼ぎをしてやるためであった。それは更に夕食時にまで及んだ

[9] 孤児や寡婦に支援を与えることについては新旧を問わず『聖書』の随所に言及がある（例えば「詩篇」68:5 や「ヤコブの手紙」1:27 を見よ）。

[10] アレッサンドロ・ナージ(1467-1511)は，フィレンツェの外交官・政治家。特に教皇ユリウス２世とフィレンツェ政府との間の外交交渉に際して活躍した。両者の友好関係を証立てる，マキアヴェッリ宛の数通の書簡が残されている。

[11] ラテン語の時間表記による冬期夜間時の二時のこと。現在の午後７時ごろ。

[12] フィレンツェ市政府において軍事と外交を担当する「戦争と平和の 10 人委員会」のこと。

[13] 時の教皇レオ 10 世。

[14] ここにはこの委員会のメンバーたちに対する皮肉の意が込められているようである。

[15] このスイス人の全体集会は，彼らがフランス王ルイ 12 世に対して，いかなる政治的態度をとるべきかを議するために召集されたものである（両者間には先立つ 1513 年の７月にディジョンにおいて協定を結んでいたが，いまだルイ 12 世による最終裁可が下されていなかった）。

ものだ。だが僕はその間何度か，ジュリアーノがコンスタンティア―この娘の名だ―にぬけぬけと語った言葉に，耳を傾け無い訳には行かなかったよ。その言葉は，君だってこれまで聞いたことがないだろう程に，この上なくお世辞たらたらなものだった。彼は彼女を，その出自の高貴さにおいて，その美麗さにおいて，その言葉遣いにおいて，更に人が一人の女を賛美し得るありとあらゆる点において，礼讃しまくったのだ。一方フィリッポはと言えば，なにがしかの折り目正しく整えられた優しい言葉をかけたり，勉強しているかとか教師に就いているかとかいった下らない質問で，この男の子との時間を無駄に過ごしたりはしなかった。彼は単刀直入に，彼と臥所を共にしたいかと尋ねたのだ。それは余りにあからさまなやり方なので，この男の子が羞恥の念に堪えられず，それに答えることなくしばしば，その面をうつむかせる程だったよ。夕食時となり，我々一同は食事を楽しく共にした。その後，火で暖を取りながら我々は，小話を聞かせたり，おしゃべりやあれこれの言葉遊びに興じたり，あるいはまた由なし無駄話に花を咲かせたりして，時を過ごしたのだった。ところが，君は大笑いしたかも知れないが，夕食の少し前の時刻に，僕とご婦人やその弟殿というよりも，むしろジュリアーノやフィリッポたちの心の平静を破るべく，ピエロ・デル・ベーネがやって来たんだ。本当は僕は彼を部屋に招き入れたくはなかったよ。だがそれを断ることも，それを取り繕うこともできなかったから，彼は僕たちの部屋に入り込んできてしまった。だがフィリッポやジュリアーノのあからさまな不機嫌を見て取って，すぐさま退散して行った次第だ。このようにして我々はその晩，夜半近くになるまで楽しく時を過ごしたのだ。その時になって隣人たちはようやく自宅に帰り，残された僕たちは床に就いた。だが我がニッコロよ，我が友達どもを満足させようとしたあげくに，自分自身がコンスタンティアの虜となってしまったことについては，君に嘆かずにはおられない。以前は時にあるご婦人が時にまた別のご婦人が，僕のもとにやって来たものさ。だが僕は彼女らに，情を移すなんてことはちっともなかった。もっとも彼女らと愉しい時を過ごさせては頂いたがね。だがそんなところに彼女が現れたんだ。僕は君に力説したい。君とてこれほどまでに美しく，これほどまでに妖艶な女性を，これまで目の当たりにしたことがないだろうと。以前から僕は彼女を，遠くから見て知っていた。だが彼女とこうして親しくなってみると，思いが募って彼女のこと以外，何も考えられない程になってしまった。僕は君が恋に落ちたのをしばしば見てきたし，君がそのためにどれほどの苦汁を嘗めたかもよく知っている[16]。だからこの際この思いに対して，僕がなしうる限りの抵抗を試みてみるつもりでいる。僕がどこまでこの思いに対して，剛毅であり続けることができるかわからない。というよりむしろ多分，それに雄々しく抵抗し続けることはできないんじゃないかと恐れている。この件の今後の成り行きについては，また君に書き知らせることとしよう。

僕は君の著作の諸章に目を通した。それは殊のほか僕には気に入った。だが未だ著作の全貌を知り得ないので，確定的な評価を下すことを控えたい[17]。

彼の一件に関して私が行ったことについて，既に先週にドナートに書き送って置いてやった

[16] マキアヴェッリの恋愛体験については例えば，1514年8月3日付マキアヴェッリ発ヴェットーリ宛書簡において詳しく語られている。

[17] この「確定的な評価を下すこと」という評言は，『君主論』そのものの評価についてではなく，前後の文脈から見てこの論考をジュリアーノ・デ・メディチに検定すべきか否かについての，「確定的な評価」と考えられる。おそらくヴェットーリは，この書簡に先立つ1月5日のマキアヴェッリ発ヴェットーリ書簡への添付というかたちで，『君主論』の当時稿了していた，第11章までの自筆原稿を受領したと考えられる。ただしそこにおける記述だけでは，ヴェットーリがこの原稿が未完成であることを知っていたのか，充分には説明できない。

ところだ[18]。彼が更なる情報を望むのであれば，それを提供するにやぶさかではない。何にせよマネンテ氏についての案件の方が[19]，［ドナートの件よりも］ずっと容易であるのは確かなことだ。何せこっちはもう，被選出者名簿への自身の名の掲載を既にかちとっているのだからね。これればかりは確かなことだ。

フィリッポは，彼が尻の軽い女たちと自堕落な生活を送っているという君の論評を，認めようとはしない。なぜなら彼によれば彼は嘘偽りないことを求める人間で，その彼にすれば君は彼につき，見境なくいろいろなことを言い散らす奴だいうんだ。

もっといろいろ書きたいことはあるが，ここで大急ぎで切り上げることにしよう。なぜならむしろ君の返事の方こそを，いそいそ読み込みたいからだ。切望する君からの手紙が落掌できるなら,それに対して日毎に1000回の返事をすることも惜しまないくらいだ。だから僕にしばしば手紙を書き送ってほしいよ。キリストが君を守ってくれるように。

フランチェスコ・ヴェットーリ
ローマ駐箚大使

1513年1月18日

【後記】

本稿の翻訳にあたっては主として N. Machiavelli {a cura di (G. Inglese), *Lettere a Francesco Vettori e a Francesco Guicciardini*, Rizzoli, Milano, 1989を底本に用い, N. Machiavelli (a cura di F. Gaeta), *Lettere*, Fertrinelli, Milano, 1981 (2 ed.), N. Machiavelli (a cura di Corrado Vivanti), *Opere II*, Einaudi, Torino, 1999を随時参照した。また難読個所については英語訳 N. Machiavelli (J. B. Atkinson & D. Sices), *Machiavelli and His Friends-Their Personal Correspondence*, Northern Ilinois University Press, Dekalb, 1996の解釈が，大きな助けとなったことも明記しておきたい。なお本稿の作成に当たっては，科研費基盤（C)・課題番号18K00107「知の技法としての人文主義的書簡と近代教養市民の形成」（代表　常磐大学・森弘一教授）から多大な支援を賜った。ここに特記し関係各位への感謝の意を表したい。

[18] ドナート・デル・コルノのこと。コルノからのマキアヴェッリを介したヴェットーリへの依頼事項については，1513年8月25日付と1513年12月19日付のマキアヴェッリ発ヴェットーリ宛書簡を参照。

[19] 12月19日付マキアヴェッリ発ヴェットーリ宛書簡参照。